

# 集団における精神薄弱児の行動過程と 保育内容との関係

今 井 斐 侶 子

## は じ め に

我が国に於ては、幼稚園、小学校、中学校高等学校および特殊教育の学校の教育課程の基準は文部省が示すことになっており、1962年に養護学校小学部、中学部学習指導要領が定められ、爾来精神薄弱児の教育を本質的に掘り下げて考えようという観点に立ち、具体目標の達成度に評価の原点がおかれるようになった。実際現場に於ても、教科の内容が精神薄弱児の特性をふまえて領域が広められるようになって来たが、教具、教材、が可能性と意欲の働き合いを、促進させるための媒介となるものであるように活用されているか、ということは大きな研究課題であった。今年三月にこの学習指導要領が更に改訂告示されたが、現場に於ては依然自主的な創造的指導が望まれている。そして問題を具体化する為には、精神薄弱児教育にたずさわる場で教育の実践的研究が行われなければならない。

精神薄弱児の幼児教育に関しても、子供同志の世界の中で発達するものだという認識が深まり早期の集団教育の価値を高く評価する様になって来た、そして精神薄弱児を持つ保護者も又関心を高め、集団教育の場を切望する様になった。

幼稚園が国家保障のもとに教育の一環した機関として組み入れられようとしている時、障害児も又同じ権利を得るべきであり、この実現へ一歩近づける為にも、集団治療教育の場における教育の実践が実証的研究の資料となり得なければならない。

精神薄弱児も適切な、物的、社会的な環境のもとに教育がなされた場合、彼らは人間として具体的な体験を通し乍ら満足感を得て発達してゆく。という前提のもとに教育を実践している場において、その保育内容と方法は現場にある指導者にとって、大きな問題になるが未だその実証的研究の成果が明らかにされていない、一応環境条件として普通教育の幼稚園に準じて設備されているが、更に精神薄弱児の本質を知る為の行動過程の探究を進め、個々の発達を促す環境条件（設備、保育内容、指導方法）が検討され乍ら明確にしてゆくことが集団教育の成果を実証し得ることになるであろう。

今回はその為の一指針として、精神薄弱児（重度）と診断されたK児——一人っ子で且つ外界の刺激の稀薄な、極めて経験領域の狭い中で4才迄の生活をおくってきた——が同年令の精神発達遅滞児によって構成された集団生活の中へ入った場合、どの様な行動をし乍ら、適応し、発達の過程をたどるかを二年半にわたるどろり教室に於ける行動記録を集約し乍ら、集団の

中での 1. 情緒の安定（対人関係の変化） 2. 遊具を用いての自由遊びの形態をとった保育内容とのかかわりあい方、 3. 生活習慣の形成について考察する。

## 方法と対象児

### 方法

- 1) 昭和44年6月入園より昭和46年9月までの約2年3カ月にわたり、月水金の週三日制のどんぐり教室における登園より帰園まで（AM9:30～12:00）の2時間半の行動を追って記述した自然行動観察法による記録を 1 情緒の安定（場と対人関係） 2 遊びの行動 3 言語 4 生活習慣の形成 別に集録してみる。
- 2) どんぐり教室は、昭和45年8月までは短大教室の三階の一室を Pr としていたが、昭和45年9月より現在の旧平安幼稚園園舎に移転された。従って空間的条件が違ふ為と本児の発達が著るしく展開する時期にもなるので、本児が入園した昭和44年6月より昭和45年8月までを第一期とし、現園舎に移転した昭和45年9月より昭和46年9月までを第二期とする。（註 PrはPlay room の略）
- 3) 観察記録は当教室の指導者がその都度同一人でなくかわって記録している。

### 対象児

生年月日 昭和40年4月23日 男児

入園時年齢 4:2

昭和44年4月の児童院の心理診断書によると精神薄弱児（重度）

生育歴…父36才 母34才時の第一子として出産、難産で帝王切開、出産時は普通児であった。

3カ月よりケイレン発作、酵素指圧治療に通院し体力をつける。

本児の発達の遅れに気付いたのは1才6カ月で生後6カ月頃まで「マンマ」「プー」の喃語が出ていたのに強度のケイレン発作以後消失、言語が出なくなった。

乳児期…母親は仕事をもち家庭での遊びは終始祖母と二人で他児との交流なく静かな遊びが多く、音楽をいつも聞かせてねかせていた。

家族構成は入園当時は父（40才 会社員）

母（38才 飲食店勤務） 祖母（父方）の三名

昭和46年7月より転宅 母親は仕事を辞め父と母と母の姉夫婦と同居

## 行動過程と考察

### 1 情緒の安定（場と対人関係）

身体的に虚弱であり、家庭内だけの経験領域の狭い中で生活して来た本児は、外界の刺激に対して極度の緊張感がともない、先ずその緊張感の解消に助力をしなければならない。家庭の中のみの生活が場に対する不安感を強め、他児との交渉のない生活では子供に対しては未知の世界である為、他児への恐怖感が強い。先ず、場と人への不安感をなくすることが指導の第一目

標であろう。

では不安感が集団とのかかわりの中で、第一期ではどのような行動をとり乍ら、次第に安定していくか、対人関係において安定感をもつようになる第二期での行動の発達過程をみてみよう。

## 第一期

### (イ) 場との関係

母子分離の点では、最初嫌やがったが、大人に対しての抵抗は余りなく（この場合T.（先生）はおおかた親からやや移行した程度の他の大人といった程度であろう）むしろ場と他児に対する恐怖感からPrに入る事を拒否。Prをのぞき込んではいげしく泣く。が回を重ねる毎にT.との関係に於て安定感を持ち得て泣き止む時間が早くなる。併しPrより出たい欲求は強くズボンの前を押えてトイレに行く事を何度も要求（トイレが室外にある）出なくても室外へ出たい欲求を満たす手段として訴える、と同時にPr内では窓側の机の上を唯一の安定場所として他児から目をそむけて窓から外を見る、その間は泣く事を止める。（註 Tは以後先生の略として用いる）

昭和45年1月～5月まで母親の病気の為休園

5月15日、来園の時母子分離が出来（母親が「先生が待ったはるよ」と云うと急いで来た）Tへニコニコ笑いかけPrの中の方へ向かって自ら歩いてゆく、母親を思い出して一たん戻すが、再びTに促されると入室、恥かしそうにTにくっつくようにし乍ら自分の行きたい方向へTを押してゆく。

併し依然室外へ出たい欲求は強く、しきりにズボンの前を押えて、用便を訴え出ようとする。他児のトイレについても一人で勝手に走り出て廊下に対して領域を拡大してゆく。

### (ロ) Tとの関係

特定のTに対して信頼感をだんだん深めてゆく、一対一でTがついて遊べば、安定した状態の時には、Tの指示が通じ遊びに入ろうとするが、Tが離れるとバランスが全くくずれ、窓側の机の上とかピアノの横とか自分の逃げ場へ逃避する。おんぶ、抱っこはいやがる、特定のTから他のTへも関係を広める。

指を目の当りでチラチラさせ、そのすき間からTを見て、Tの関心を寄せつけようとする。イナイイナイバア等はよろこぶ「チェンチェ」と早口に呼びかける、Tにニコッと笑いかけTの手をとる、おやつの際は椅子をわざと倒してTとの関係を楽しむような行動が出る。

46年7月Tに自ら近づき手でTの顔をピチャ、ピチャ、と叩き、しきりに何か訴えるが通じない、と他のTのところへ走ってゆく、外へ出たい欲求の強い時もTに「今いったところでしょう」と云われると他のTへ行き訴える。

Tへの関係を深めつつ、他児への恐怖感が次第に弱まり、他児への関心をもち始める。

### (ハ) 友達との関係

最初他児が窓側の机の上へ上ってくると、自分は下り乍ら手を前へ出して防ぐようにする。9月になって他児が机の上のK児を叩いたり、押ししたり、こわがらせたりする働きかけの行動が出て来てやられて泣く、特にI君、N子にやられるが、その他の子供が近寄った場合にはN子の後に逃げてかばってもらおうとする。他児に追っかけられ逃げる。

グループの中で最も行動力の少ないM君をのぞきにゆくようになる（M君が自閉症児の為働きかけは一方的）。

## 第二期

### (イ) 場との関係

園舎の移転により場所的な開放感が前の教室より持てたのであろうか活動的になってゆく。

Pr への入室は余り嫌がらずに母親に、カバンを渡されると自分で持ってカバン掛けまでTとゆく、登園の途中他児にあって一緒に手をひかれて小走りになる、父親にも送ってきてもらうようになり分離はスムーズになる。

庭を走り廻れるのが嬉しくて、門を入るとすぐに走り廻ろうとする靴もカバンもポンポンと放って脱ぎ靴下のままウロウロする。

ここで裸足にして砂の感触を十分味わせようと毎朝来ると裸足にすることを試みる。

裸足になると非常に喜ぶ。

室外へ出たい欲求はなくなり、(自由に庭に出られるから)

従ってトイレへゆく催促の行動がなくなる。

手にいつも何か持って(鈴、カラーベルト、ボーリングのピン等)

絶えず手先で振るような行動をする。

嬉しい時に左手を前に親指と人差し指を真直ぐに他の指をまげた形にして差し出し眺めて「アハハ…」と笑う。

庭の隅の石の上を安定場所に定める。

### (ロ) Tとの関係

第二期になり言葉による指示が通じる様になり徐々に可逆操作が出来る様になる。

男性のTが加わり、信愛の情を深める、自分の行動に対して、Tの承認を求め、満足感を感じる。

登園する事を大変喜び早く行こうとカバンをもって母親を促すとのこと。Tと途中であうとカバンを下げてサッサと一緒に幼稚園へ来るような姿勢でくる。

4月の新学期の頃にはニコニコ笑顔で登園、Tの「おはよう」に笑っておじぎをするようになる、送ってくる父親にも「バイバイ」と手を振るが、タイミングが合わない、帰りもわざわざTを叩きにきて、おじぎをする。かなり情緒的にも安定して来たが庭の隅の石の上を唯一の心の休息所に定め、一走りすむと石の上へあぐらをかいて坐りTにも坐るように促す。

この石の上にTと坐っている時は最も情緒的に安定感をもつようだ、Tに抱かれにくる。

### (ハ) 友達との関係

Tの手をとり、Tを自分の側においておこうとし乍らも、他児への恐怖感は全くなり、他児を見る為に自分の定位置より離れるということがしばしばあり、他児への関心が急速に高まり、他児の行動を見にゆく様になって、対人関係の上で安定感を持ち始める。そして自己主張がみられる。

そーっと横に坐っている女の子の髪の毛をさわる。

他児から呼びかけられ、働きかけられても、逃げないで横へ横へ寄って行って、他児の行動を見る、積極的に自分も遊びの中へ入ることは出来ないが、見て手を叩いて喜ぶ。

Tの媒介があれば、かなり多勢のグループの中にも入る事が出来る。

グループの中でも、他児への無関心な、A児、M児へ組板の棒を渡そうと努力するが、渡されている。

A児、M児に受取る意志がなく目的を達しない。

Y児の肩を叩きにゆく。

自分の、持っていたムギワラ帽子をM児にとられ、Tに援助を頼むが「かえしてともらいなさい」と云われ、M児がかぶっている帽子を取りかえす。

A児と二人Tの両手を引っ張って、Tのとり合いっこをする。

E子と追いかけて、追いかける方で、追いにはいかないが「アハハ……」と笑い乍ら逃げる。

## 2 遊びの行動過程

精神薄弱児においても、当教室に来園することの出来る子供達は、遊びへの興味をすべての子供が持っていると言えよう。彼らの生活の時間内に遊びの行動によって、しめる部分が大きければ大きい程、発達の糸口は多様化し、その媒介として遊具が十分活用されるべきであろう。

情緒の安定と相まって、遊びの行動がどの様に展開され、遊具に対して（当教室にある限定された遊具の中で）どの様なものが興味の対象になってゆくかを見てみよう。

表から行動の特長と保育内容をみてみよう。

発達の子行動記録一覧表

	第 一 期		第 二 期
砂 場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初砂場に入れられた、K児は泣き乍らもTの動かす汽車を見る、自分はふれないTがフルイで砂をふるって見せると、自分も砂を手でふるわせるようにして下へ落す何回もくり返す(44/6)</li> <li>・次回には足で砂をける。</li> <li>・他児が片付けでいなくなると、砂場にあった汽車やバケツ、机の上の画用紙にも落しに行く。</li> <li>・次につかんで見て、投げる。 (側にいるTに笑いかけ、認められていることを確める)</li> <li>・これを十分した後自動車にTに渡して動かしてくれと要求。</li> <li>・次第に砂場に安定感をもち、Tがいなくても一人で入って、けったり、落したりあきずに続ける。(44/10)</li> <li>・他児が入ってくると、泣いて、Tに助けを求めているが、次第に他児が入って来ても泣かなくなる。</li> <li>・他児に砂をかけられても無関心。</li> <li>・スコップを持つがクルクル回す。 (44/11)</li> </ul>	砂 場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂をジャングルカーに乗っている他児にかけに行く。(46/4)</li> <li>・砂場で遊んでいる他児にも、ままごとをしているグループにも頭からザーッとかけに行く。(46/4)</li> <li>・三輪車やフロアカー、弁慶号、スベリ台、トンネルにも時には室内へもばらまく。(46/5)</li> <li>・Tと一緒にままごとの御馳走を食べに行き「ドウゾ」にお茶碗をもって食べるまね。(46/6)</li> <li>・Tに誘われて、多くの他児と一緒に乗って走る。</li> </ul>
		チューブ車	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Tに促されると乗る気があり、自分から乗る。 Tに押してもらった後、自分で、二、三回はこげる、「アハハ」「ジージー」と笑い声をたて乍ら乗っている、他児が取りにくくと下りてしまうがY児の走る横についてまわる。(46/5)</li> </ul>
玉 通 し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・玉をバラバラとまくことに快感をおぼえる、一個づつつかむことは出来ない。(44/6～第二期)</li> </ul>	弁 慶 号	<ul style="list-style-type: none"> <li>・M子に弁慶号に乗っていて引っ張ってもらう。(46/7)</li> </ul>
水 遊 び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水が水道から出るのを見て足を交互にふみ乍ら見る。(44/6)</li> </ul>	フロアカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・M子にフロアカーに乗ろうと「Kチャン、Kチャン」と呼ばれ側まで走って行くがUターン。(46/7)</li> </ul>

いろは積木	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Tに渡して、Tの積むのを見る。</li> <li>・Tが離れると足で蹴ってこわす(44/6)</li> <li>・他児がこわすのをみても喜ぶ。</li> </ul>	ジャングルカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A児と二人で乗って坐る。</li> </ul>
乗物	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誘われるがのらない。(44/6~10)</li> </ul>	ボール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Tの投げるボールを上手に受ける。</li> <li>・Tへ投げ返す。</li> <li>・他児のまねで外へ投げる。(46/7)</li> </ul>
ボール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初は放っても全々興味なく知らん顔</li> <li>・45/6Tにボールを当てられ逃げて廻りTにボールを渡されると持ってわざわざ洗面所の方へ持って行きすて( Tに投げさせない為か)</li> <li>・その後ボールをTが投げてとれないとTの「とって」の指示に従って取りに行き、「Sになげて」と指さすと、投げるようになる。</li> <li>・7月にはTの方へ投げ返す。</li> </ul>	走りっこ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ヨーイドン」の合図でTと何回も走る。(46/1)</li> </ul>
輪投げ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輪を棒の方へ投げる。(44/7)</li> </ul>	平均台	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Tに手をとってもらって足を交互に出して渡れる。(46/1)</li> </ul>
走り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人で走れる。(45/11)</li> </ul>	マット(相撲)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第一期ではマットに身体がふれると非常に恐れたが、M児がTとしているのを面白そうに見ていたので、最初無理に取り組んでねかせ起きようとするところを何度も何度も押えつける中にTにしてみらう事を期待する表情になり、「アハハ」と楽しそうに笑う、次にM児と組合せようとしたが、M児が逃げてしまう。(46/4)</li> <li>・マットの上で両足とび。(46/6)</li> </ul>
プール(幼稚園を借りて)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初全く近寄らず、テラスをウロウロ、Tに誘われても知らん顔であったが、後仕末の頃、スノコ板を伝って側まで行くが結局入らない。(45/7)</li> <li>(水遊びは出来なかったが場には適応)</li> </ul>	椅子ころがし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テラスから何度も転がして落す。(46/5)</li> </ul>
グループでするリズム遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・顔をかくして殆んど入らないでピアノの横で身体をゆする。</li> <li>・運動用具には誘われても逃げる。</li> </ul>	スベリ台	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自らサッサと上って滑って下りる、もう一台も。(46/6)</li> </ul>
音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第一日目よりレコードがなると泣き止む。</li> <li>・Tの叩くタンポリンに合せて足を交互にふみ、身体を左右に振る動作が出る</li> <li>・自ら楽器をもってリズムに合せるのではなく、リズム曲がなると身体でのみ。左右に振ってリズムに合せ、テンポが早くなると早くゆする。(44/6~45/6)</li> <li>・Tにピアノを弾くことを執ように、要求し、止ると必死で促す。(44/11)</li> <li>・45/6月頃「結んで開いて」がなると手を叩いて「その手を上に」のところまで両手を上へ上げる。</li> <li>この頃は砂場も拒否、専らピアノの側で身体をゆする常同行動のみで過す。</li> </ul>	スライドボード	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二段目に足を自分からかけて上りジーンと立っている、A児がボードの板をはめて動かし、足に当たると「ア、ア」と下ろしてくれとせがむ。</li> <li>一人では下りれず、マットの上へ両手をもってもらってとんで下りる。(46/6)</li> </ul>
		下駄箱の上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・続いて下駄箱の上へTに乗せてもらって、手をもってもらって下へとぶ。(46/6)</li> </ul>
		水彩画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・筆に絵の具をつけて、こわいもののように、パッ、パッ、と放る。(45/9)</li> </ul>
		音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノの音に対しては身体を振るが、第一期のように固執せず、他児への関心が高まり行動範囲が広がって、リズムや歌がなってもピアノの側へとんでこなくなる。</li> <li>・歌のメロディを正確に口ずさむ。</li> <li>・46/5月14日庭の隅の石の上で、Tが「夏も近づく」「せっせっせ」など歌っている中に例の指を前へかざしてじーっと見ている「ウマウマウマ…」</li> </ul>

		<p>とロンドンの橋のメロディを口ずさむ、音程も正しくとれている。</p> <p>「アアア」にかわり「オーオー」「エーエーと」発音をかえて三度同じメロディを歌う、他の歌を歌うと違うと手を振ってロンドン橋をうたう(15分位)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5月17日再び石の上でTと「ロンドン橋」「ちょうちょ」「お手々つないで」「汽車汽車シュッポシュッポ」を「ヨーヨー」とか「ウマウマウマ」「ア、ア」などで歌う、歌の終る最終小節は「アー」と長く大きく発声する。</li> <li>・ 5月21日 ピアノの横でもピアノなしと一緒に坐って歌う、ピアノを弾くと身体をゆする。</li> <li>・ 6月18日 リズム遊びで他児が「オモチャのマーチ」に合せて歩くと、自分は参加しないが、かなり大きな声で「ラッタラッタラ」といい乍ら足を開いて交互に足をふむ動作。</li> </ul>
	グループ遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「子供の王様」に手をつないで輪になる。(46/1)</li> <li>・ 「出して引っこめて」は、前へ手を出す。(46/1)</li> <li>・ 他児の汽車遊びのトンネルをTと一緒につくれる。(46/5)</li> </ul>
	プール遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 皆んなが入っている間はテラスでウロウロ他児の様子をうれしそうに見ている。他児が出てからTに連れてもらって入る、ぬれるのはいやでない、かけられても逃げないで、ジョロに水を入れて、ジャーと流す一つの行動に固執する、Tが弁慶号をプールサイドに持っていくと、それにジョロの水をかける、M子が、それを、スポンジで洗ういかにも、水をかけて、やっているように見えるが、自分の世界で楽しんでいる、Tに手をつないでもらって、プールの中を走りまわる、喜ぶ、今度は出ることをいやがる。(46/7)</li> </ul>

## 第一期

最初本児が集団の中へ入って遊びの場として安定感を持ち得たのは砂場であり、砂に先ず、手や足でふれる経験から出発して、遊具へは手で触れる前に砂をかけることによって遊具への関心を示す、次に家庭でも用いた事のある様な遊具を手にするが、遊具を遊びの材料として用

いるのではなく、ただ触れてみて放る、といった行動に終始する。しかし遊具に対しての関心はあると言えよう。やがて砂場の中では他児と共に一人でいられるようになる、この事は子供同志の世界の中へ入ることになり、集団の中での生活への発達の第一歩と見られる点であろう。運動機能の発達を促す遊具には全々恐れが強く経験しない、音楽に対しては異常な程の固執性が見られ、ピアノを弾く事を執ように迫り、自分の世界の中に閉じ込めようとする行動が強くあらわれる。

## 第二期

砂遊びでは第一期では対象が物であったのが第二期になってTや他児へ即ち人に移行し関心の領域が広がってゆく。物に対しても庭にある遊具、ジャングルカー、スベリ台、トンネル、乗物などドンドン拡大してゆく、そして砂をかけるだけでなく乗物などに自分自身が乗る様になる、行動範囲は広くなり、遊具は発達への媒介として用いられる、集団の中での生活が習慣化してきつつ、時にはグループの遊びの中にも参加出来るまでに発達が見られる。

遊びが出来るとピアノに対する固執性もうすらいで歌として楽しくきき、メロディーを発声するようになる、保育内容としての評価ができるわけである。

プール遊びにも大きな発達がみられる。

次に音楽と言語の行動過程について見てみよう。

本児が音楽に対して非常に敏感な反応を示し、ピアノを弾いて欲しいとの要求強く、第一期では遊びの行動に自閉的な傾向が強く、音への固執性が強い。身体をリズムに合せることにより快感を得ようとする、が第二期になり、少しずつ他児への関心を広め、行動範囲を拡大し、自己活動をなし得る様になってくると共に、音に対してもメロディーを口ずさみ、音楽性が見られる様になる。そこで更にこれを言語への発達の糸口としてたぐり寄せるべく、K児は喃語でもってメロディーを発声するに対して、Tは出来るだけ、はっきりと歌詞を言い乍ら歌うように留意する、と共にリズム表現を身体をふる常同行動から脱却させ、楽器や、歩いたり、とんだり、の行動で表現出来ることが望ましいが、これは更に今後の課題であろう。

言語については、本児はその過程の分析を叫声、片言、語構成の三つの発達段階に区別されるとすれば叫声に属するものが多く、精神発達の遅滞を知る事が出来る。

遅滞児ばかりの集団においては言語を通じてのコミュニケーションがない為に、ますます行動のみで表現することになる。この点から普通児との交流が考えられるであろう。

砂遊びをし乍ら「ウフッ」「イヒッヒ」「エッエッエーッ」「アーエ」「イヤーエ」との叫び声のみで語としては「パパ」「ママ」「チェンチェ」が44年9月頃より出る。

45年6月頃より、Tの指示が通じるようになったが自分の要求はすべて「チェンチェ」とよびかけ手まねですませる。

46年9月に庭の隅の石の上で、父に「バイバイ」と手をふってから「パパカイシャね」と何度もTが云う中に「カイシャ」と早口に云う、そして「Kーチャン」「Kーチャンね」と何度も反復、云っている中に「Kーチャン」と低い小さな声でささやくように早口に云う。



### 3 生活習慣の形成

習慣形成の面では特異傾向のある幼児では自発的行動が出にくく、根気よい反復指導が必要であろう。

本児の場合も入園時に漸くおむつをとった状態ですべて大人にしてもらうように自分の行動を合せていくのは習慣としてかなり上手に動かせたが自立性は全くなく、第一期に於ては習慣の形成は出来なかった、おやつやお弁当も楽しんで食べるまでに至らなかった。

第二期になり、指示が通じる頃には、少しずつ自分であろうという行動が出てくるが、習慣として身につくには、かなりの努力が必要である。

第二期での著るしい進歩は入園以来いろいろな試みがなされたお弁当であったが食べず非常に対人関係が安定してきた46年1月20日Tの誘導で食べ、それ以来楽しくお弁当が食べられるようになる。片づけも少しずつする意志が芽生えてきたようだ。

Tがついていて指示すれば靴は靴箱へ入れ、帰りは出す、カバンはカバン掛けまで持ってゆく、カードは貼らない、自分でズボンを下ろし、おしっこが出来る、上げようとする、トイレの水洗のcockがまだ正確にわからない、手洗いの水道のcockも開閉がわからない、タオルでは拭く、自分のがわからない。

遊びの片付け、Tに渡される箱積木を待っている別のTのところまで何回も運ぶ。

ミニカーを指示された棚に置く。

おやつの前のお眠りもTに連れられ少しの間坐れるようになる、食べた後の皿、コップを棚の上の盆まで持ってゆける。

お弁当、一人でスプーンをもち食べる、T達の拍手をうけると自分も手を叩いて喜ぶ、46年1月20日、Tに食べさせてもらったのをきっかけに全部食べる、それ以後、手を出すきっかけをつくるとサッサと食べる。

5月になり、前学期は一口食べる毎に両手を叩き足をトントンふみ鳴して喜こんだが少しおちついてニコニコし乍ら他児の食べる様子を見て食べる。

風呂敷に包んでもらうとカバンに入れることは出来る。

名前をよばれて、返事はしないが手を上げて出席カードを取りにゆく、カードが長く持てなくてすぐ放ってしまう。

お弁当の時、カバンが見当らなくて泣き出し、取ったと思われる他児M子を叩きにゆく、——素直な感情の表現。

生活習慣の形成は、保育内容として大切なものであり、集団の中でこそ反復を根気よく続け、習慣化させる様に余裕をもって指導してゆきたいものである。

### まとめと今後の問題

場と人への緊張度が高い本児が、彼なりに安定の場を作り乍ら、又場から解放感を求める手段を考えつつ、領域を拡大し、Tへの親頼感を深め、Tの愛情を確め乍ら、他児への関心もち、自ら働きかけようとする行動がでてくる。自分だけの世界から少しずつ脱出しようとしている。発達遅滞児の場合、特に指導者との親愛感が深く持たれるべきであり、指導者との交流を通し、情緒的安定を得て子供同志への働きかけがなされてゆくのである、今回の行動過程の変化をみても、集団とのかかわりにおいて著るしく対人関係の成長発達が見られる。

遊具に対しては、関心は持ち始めるが、すべて遊びの方法がわからない、知的な発達ともなわない点もある。しかし関心のあることは指導の糸口が見い出せることであり、乳幼児期の砂、水遊びなどの泥んこ遊びが十分出来る設備がもっと考えられてよいのではないだろうか、本事例の場合も健康状態からみて第一期の発達はジグザグ状態をとり乍ら、少しずつ発達の変化があるのに対して、第二期では、本児の健康状態もよく、又家族の熱意もあり、休まずに通園してきたことが発達の領域を広め活発化してきたともいえるだろう。従って運動機能を発達させる遊具に関心をもちはじめたのを見ても、思いきり自分をぶっつける事のできる空間的条件、運動用具などは発達を促進させるに必要な遊具と言えるだろう。一つの遊具が固定した遊びの遊具としてでなく、あらゆる角度から応用し発達の糸をたぐり寄せるような介在物として指導者は、あらゆる場に活用しなければならない。そしてその資質は指導者の如何にあるとすれば、指導者は学問的知識を深めると共に常に創意工夫がなされねばならない。従って保育内容も又この観点より考察し準備されなくてはならない。日々の観察から、意図的に色々な試みがなされて良いであろうし、次の発達を予想しての指導の在り方と教育形態を研究してゆくのが今後の課題であるのではないだろうか。

#### 引用参考文献

- 三木安正 精神薄弱教育の研究 1969. 日本文化科学社。  
養護学校学習指導要領の改訂をめぐって 精神薄弱児研究 1971, 4月号 日本文化科学社。  
今田素子 障害児の発達保障とその指導に関する基礎的研究 教育研究第44号 1970. 京都府教育研究所。  
近藤薫樹 「集団保育とところの発達」 1969. 新日本新書。  
田中昌人 「精神薄弱児」研究の方法論的検討 心身障害者福祉問題研究叢書2 1968. 心身障害者福祉問題総合研究所。  
ア・エル・ルリカ編 山口・松野・斎藤・小村共訳 精神薄弱児 1971. 三一書房。